

「人間の条件」



第5部 <死の脱出>

第6部 <曠野の彷徨>

2005（平成17）年7月9日鑑賞<シネ・ヌーヴォ>

<第5部・第6部は美千子を求めての脱出劇！>

第5部は「死の脱出」、第6部「曠野の彷徨」とサブタイトルがつけられているとおり、全編美千子を求めての脱出劇が描かれる。しかし、そのラストは・・・？

脱出劇の中、際立って目立つのは梶の強靱な精神力と肉体。すなわち前者は敗戦という状況の中、それまでの価値観がすべて崩れさり、どんな考え方でどんな道を選ぶのがベストなのかがサッパリわからない中、梶は美千子のもとに帰るとい明確な指針を持ち、その目的に集中できるすばらしさ。そして後者は、20歳そこそこの寺田でさえ舌を巻くような足の強さ。脱出のために必要なことは、とにかく歩くこと。したがって逆に老人や女子供は、否応なく途中で脱落していくことに・・・。

<密林を抜けられるか？>

戦場を離脱した時は、梶と寺田そして弘中伍長（諸角啓二郎）の3人だけだったが、脱出の旅を続けているうちに、あちこちで敗残兵や避難民たちと出会うことに。戦争は終わっても、友軍との合流を希望するのが兵隊の人情・・・。したがって、将校や兵隊の中には集団を組んでしばらく山に立てこもると息巻く者たちも・・・。しかし、梶はあくまで美千子の待つ（？）南満（南満州）を目指す脱出行を選んだ。

迷い込んだ密林の中で梶たちが出会ったのは、避難民の老師教夫婦そして慰安婦の竜子（岸田今日子）と梅子（瞳麗子）たち。そして部隊から落伍した匹田一等兵（清村耕次）など。彼ら彼女らは梶の強靱なリーダーシップに頼ってきたため、梶はこれを引率して地図も磁石もないまま密林の中を彷徨い歩いた。水も食料も尽きる中、果たして一行は生きてこの密林を抜けられるのだろうか・・・？

<早くも中国人の民兵組織が！>

一難去ってまた一難。密林をやっと脱出した梶たちだったが、生き残ったメンバーたちは早くも組織された中国人の民兵たちの攻撃にさらされることに・・・。民兵たちからみれば、日本人であれば、兵隊も民間人も、そして男も女もないのは当然。束の間の平和を楽しんでいた梶たち一行は・・・？

<ある姉弟のストーリーも・・・>

梶たちが出会った避難民の中に2人の姉弟がいた。この姉を演じているのが、若き日の中村玉緒。親戚の家に来ていた時にソ連軍に蹂躪されたため、北湖頭の家まで帰りたいというのが彼女の願い。梶は逆に自分と一緒に南満に行くことを提案したが、彼女はどうしても北湖頭に帰りたいため、途中まで送ってほしいと懇願。これを快く（？）引き受けたのが、匹田と途中から合流していた敗残兵の桐原伍長（金子信雄）。しかし、この姉弟に対して、この2人の兵隊がとった行動は・・・？

<丹下の選択は？>

途中で合流したアカが持っている（？）丹下一等兵は、「あの戦争」が日本の敗北で終わったことを知ると、ソ連の赤軍は日本軍のような侵略するための軍隊ではないという、社会主義的思想をどこかで信じていた。しかし、果たして実態はどうか？それはあくまで理論上のことだけで、机上の空論にすぎないのではないかとそんな思いは梶も同じ。

2人は時々そんな議論をしながら脱出劇をくり返していたが、遂にある時点で丹下はソ連軍への降伏を決意。もちろん、どちらの選択が正しいのかは誰にもわかるものではないから、梶もそれを止めはしない。さて丹下の選択は・・・？

別れた直後、ダダダーという音が聞こえたが、これは果たしてソ連軍の自動小銃の音だったのか、それともキツツキの鳴く声だったのか・・・？

<転機となった開拓部落での事件>

脱出劇の中、梶たちはある開拓部落を発見。用心しながらその中に入っていくと、そこは1人の長老（笠智衆）の他は多数の女ばかりの村。逃げるあてもなく、ここにとどまっている女たちは、日本兵には畑を荒らされ食料を奪われるが、女たちを求めてやってくるソ連兵は黒パンを持ってくるだけマシ・・・と梶たちに語った。そんな悲しい現実に対応しながら生きていた女たちは、梶たち一行と一夜限りの安らぎの時間をもった。しかし翌日、梶に従って出発するか、それともここに残るか話しているところに、突然現れたのが自動小銃を持ったソ連兵の一部隊。梶たちは物かげに隠れ、これを迎え撃つ態勢をとったが、とっさに高峰秀子扮する部落のリーダー格の女がソ連兵の前に飛び出し、「兵隊さん、撃つのはやめてくれ！」と叫んだから、こりゃ万事休す・・・。やむなく梶は高々と両手を挙げて降伏することに・・・。

女たちにしてみれば、ここで撃ち合いがはじまれば、どちらが勝ってもこれ以上ここにとどまることができなくなるのだから、当然の現実的選択といえばそうなのだが・・・。これも人間が生きていくための悲しい1つの選択・・・？

<捕虜収容所での生活は？>

劇団四季のミュージカル『異国の丘』（01年）は、ソ連軍の捕虜となってシベリアに抑留された日本人捕虜の悲惨さが1つのテーマだったが、梶たちは「シベリア送り」とされなかったから、まだマシな方・・・？それでも捕虜の惨めさはどこでも同じで、食糧事情は悪く、労働条件は悪いもの。かつて梶が老虎嶺鉱山を目指していたような人道的配慮をするヤツはソ連の赤軍にはいないのか・・・？梶はまだまだ体力が残っていたから大丈夫だったが、ソ連軍との戦闘で右腕を負傷している寺田二等兵にはこの労働はきつすぎるもの。そこで一計を案じた梶は・・・？

<収容所にもうまく立ち回るヤツが・・・？>

脱出劇の中、あの北湖頭へ帰りたいという姉弟を送っていき、「適当に扱ってやったよ」と平然と言いつつ匹田と桐原に対して怒った梶は彼らを追い出してしまったが、梶と寺田は何とこの桐原に捕虜収容所の中で出会うことに。そして桐原はここでもうまく立ち回っていたらしく、今は日本人捕虜を管理する立場になって甘い汁を吸っていた。梶や寺田に恨みを持つこの桐原は、生きていくために残飯あさりをやっていた寺田を発見するや、寺田に攻撃のターゲットを・・・。

<赤軍の裁判は>

桐原の行為を告発し、捕虜の待遇改善を要求した梶は赤軍の裁判を受けることに・・・。今でこそ司法の世界では「法廷通訳」の大切さと難しさが強調され私も数回講義をしたが、こんな捕虜収容所の中で日本人兵士がつとめている通訳は権力の「お先棒かつぎ」みたいなもの。平気で誤訳したり、挙げ句の果ては正反対の言葉で伝えることも・・・？そのため、きわめて当然の要求をしたはずの梶は、何と赤軍の将校から「ファシストのさむらい！」とののしられることに・・・。

梶は老虎嶺鉱山の現場で、鉄条網の中の特殊工人たちと人間としての心の対話を望み、何とかそれを実践しようと努力していた。しかし言葉が通じないこの捕虜収容所の中では、逆の立場からの同じような梶の努力は空回りし、事態を悪くするばかり。その結果ついに梶は処罰として、より遠方より労働条件の悪い労役に就かされることに・・・。梶はそれもやむなしとして従ったが、心残りは、右腕の負傷で苦しんでいる寺田のこと。梶は周りの捕虜たちに「寺田をよろしく頼む」と言い残して出て行ったが・・・？

<丹下と再会したもの>

裁判によってより重い労働に就かされた梶は、そこで思いがけない人物と再会した。それはあの脱出行の中、ソ連軍への降伏の道を選択した丹下一等兵。その結果、一足先に捕虜収容所に入っていた丹下も、梶との再会を喜び、「あまり無茶をするな！」と梶に忠告したが・・・。この映画ではこの後の丹下の生き方は描かれていないが、社会主義国ソ連への理解を示す丹下だから、その後は何とか無事に生き抜いたことだろう・・・。しかし一方梶は・・・？

<寺田の惨殺を聞いた梶は？>

無事、重労働の労務を終えて帰ってきた梶を待っていたのは寺田の惨殺という不幸なニュース。もちろんケガが悪化したなどのやむをえない理由であれば梶も納得するはずだが、寺田を惨殺したのはあの労務管理の桐原だった。寺田の死因は、少し元気になったため残飯あさりにでかけた寺田を見つけた桐原が、ここぞとばかり寺田を痛めつけたうえ、便所の肥溜みの仕事をいいつけ、ぶっ倒れるまでそれをやらせたこと。これを聞いた梶は、もはや理性を失ったかのように「ある計画」を実行したうえ、遂にこの捕虜収容所を脱出。そしてただ1人、美千子を求めて、南満への旅に・・・。さて、その美千子を求める旅の結末は・・・？

2005（平成17）年7月14日記

- ・ [総論](#)
- ・ [第1部、第2部の評論](#)
- ・ [第3部、第4部の評論](#)